

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱手當雜誌第百八十三号
明治三十二年十月十日第三種郵便物認可(毎月)一回一日発行
平成十七年二月一日発行(第百八十三号第三号)

ホトトギス

三月号



俳句随想

二百七十三

汀子

何故私は最後の仕事として「天地有情」という投句欄をホトトギスの中に設け、その選をしようとするのか。虚子の晩年の思想、もしかすると虚子の仕残したかもしれない仕事を引き継ごうと思うからである。虚子の晩年の思想として重要なのは「存問」という思想である。私はこれまで「存問」を、人と人との存問、自分自身に対する存問、自然に対する存問、超越的な存在（神）に対する存問などに分類し解説してきたが、あらゆる存問の根底には、実は森羅万象が生命を持ち、感情を持つという認識がなければならぬ。つまり「天地有情」という直観がなければならぬ。

「天地有情といふ。（科学は関せず）／天地万物にも人間の如き情がある。日月星辰にも情がある。／禽獣虫魚にも情がある。／木石にも情がある。／畢竟人間の情を天地万物禽獣木石に移すのである。／詩人（俳人）は天地万物禽獣木石類に情を感じる。（中略）／天地有情といふ。（遠き未来には科学もまたこれを認めるかもしれぬ）」

【『虚子俳話』昭和三十三年十月二十六日】

旬日記

汀子

平成十六年三月一日 ロイヤル俳壇

踏み入りて能の世界や実朝忌
暖かといふ落し穴あり暖か
又次に向ひ落し穴あり暖か
東風の雲ぐらりと抜けて空の旅
道それて又元の道暖かし
三月六日 芦屋ホトトギス会

離飾りたるより客を通す部屋
雨の糸より春の雪見えて来し
三月七日 野分会

卒業の話に及ぶ半世紀
何もないやうで楓の芽なりけり
まだひそめぬしかにありて楓の芽
進路あり別れのありて卒業す
鳥群れて何啄むや楓の芽
三月七日 下萌句会

治露酒を飲まず禁酒を守りけり
あたゝかと思ひしことも忘れけり
太陽と春の雪雲入れ替はる
踏まれしはたしか名草の芽なりけり
治露酒といふ口実のありにけり
三月七日 三須虹句集序句

ふり返る日々ありてこそ暖かし
三月九日 大阪俱樂部
富士山を囲む山より春めける
昨日まで春を忘れてをりしこと
六甲の稜線重ね春の山
三月九日 綿業俱樂部

暖かとなること知つてゐる外出
燕や日本空を忘れずに
本日のあたかき日となりけり
海よりの風をまよひぬ暖かし

燕に空も大地もとのへり
三月十日 清交社

心地よき東風吹き抜ける渡り廊
開き切るまで待てぬ鳥藪椿
鮎子を出して東風のしづまる午後となる
三分の二は春眠のほどけぬ座
鮎子に添へし便りの二た三言
まこと艶佐保のあけぼの椿活け
わが庭の五色椿へ案内して
椿咲く庭の春秋はじまりし
三月十二日 工業俱樂部

春めくや旅の計画動き出す
啓蟄や大地うるほす雨一と日
啓りなく春めく一と日なりしと日
日本間を桃の節句に開け渡す
三月十三日 関東ホトトギス俳句大会前日句会

薄氷となり風だけが届かざる湖
山の日の春めく心届かざる
幾万の木々の芽吹に捉はるる
山湖には当らぬ予報冴返る
三月十四日 関東ホトトギス俳句大会
うららかなや観音見上げぬ限り
観音と目線の合はぬ臍かな
ヴィオロンもヴィオラもチェロも春の青
三月十五日 アサヒカルチャー

東京を朝発ちて来し日永かな
朝月の西へ帰路ありあたゝかし
忘れものしてものどかでありしかな
三月十六日 有恒俱樂部

大試験すみし表情皆違ふ
みよし野の消息いかに西行忌
立ち上げしプロジェクトより春めきぬ
大空に渋滞はなし鳥帰る
初花の近しと聞きて諾へる

生涯の岐路の一步ありぞめし
西行忌とて旅ごころありぞめし
三月十六日 無名会

西行忌吉野に旅路ある限り
みよし野の花の仔細はまだ問はず
計画は一年がかり西行忌
蠢るや曖昧な山見えて来し
いつもなら見ゆる六甲蠢れる
西行忌旅の計画動き出す
三月十七日 野分会

初花を誰もが仰ぎゆく高さ
三人のコーヒータイム卓臍
刻々と咲き初花ともういへず
白酒は禁酒のうちに入らざる
講演の原稿おぼろ臍かな
逆光の視野に初花紛れけり
三月二十三日 中嶋よし絵様

かへりみて女医の暦日麗かに
三月二十五日 きざらぎ会
会終へて人の心のあたゝかし
踏まれたる跡逸れてぬし名草の芽
句日に托す吉野の花の旅
三月二十六日 時雨句会

たくましきゆ糸醜草の芽なるべし
時てる嶺々越えて引く鶴ならん
午後晴れて引鶴に空開け渡す
みよし野の旅の近づく西行忌
はらからの消息二三西行忌
三月二十七日 句会と講演の会

椿咲く限り來る鳥ある狭庭
今日晴れて刻々花の東京に
三月二十七日 野分会
句日の動きありけり楓の芽
東京は花の日和となりけり

東京は花の日和となりけり

廣太郎句帳

廣太郎

平成十六年三月三日 一水会

彼の日より難忌遠くなるばかり
雲雀野に地球は丸さ失へり
揚雲雀空が包んでゆきにけり

三月四日 蕉心会

春日となり中天に落着けり
温む水大川の嵩変へてをり
人間は二足歩行や春の土
霞より現れて佳人と判るまで
船音の遠ざかりつつ霞みけり
水尾鎮め船暖かく交叉せり
三月七日 日本伝統俳句協会関東支部大会
水温みつつ音奏でつつ流れ
帰心てふ鴨の羽音でありにけり
句座ぬくしタカラジェンヌのやうな君

偲ぶとは山菜萸の黄に寄す会話
三月十日 三田鶴吉様句集出版記念会
春灯下縁となりて句集祝ぐ

三月十一日 上筆会

これよりは燕の空でありにけり
三月十三、十四日 関東ホトトギス大会
薄氷となりて湖心へ去りゆけり
野良猫の恋観音のふところに

三月十六日 草木瓜会

土筆摘む尻が遊んでをりにけり
土手といふ土筆の高でありにけり
水温む草木瓜会の未来かな
多摩といふ川幅に水温みけり
太陽を一人占めしてつくづくし
水温む新同人の生れし句座
三月十八日 登高会
菜飯てふ色に食卓整へり
大根の葉の蘊蓄や菜飯炊く

曲水の宴言の葉を流しをり
曲水の宴に仙巖園広し
海鳴りを聞いて垣繕ふ生活

三月二十日 国際俳句シンポジウム小句会「五つ輪」

初花といふ落着きにある芦屋
三月二十一日 芦屋市 庄司様送別会
邂逅といふ言の葉のあたたかし
三月二十三日 若水会
母を恋ふさまも仔馬でありしかな
つんつんと仔馬の尻でありにけり
恋破れ佇つ水温む川辺かな
薔薇の芽に絡みついたる言葉かな

三月二十四日 目黒学園句会

黄金に乾ききつたる花菜かな
春雷を近づけてあるビルの群
春の雷湖の漆黒解かざる
三月二十六日 時雨会
引鶴や空と対話をしてをりぬ

雑詠

汀子選

露の世をここに見下ろし摩天楼
 秋惜む神を恐れぬ高さより
 秋惜む青空使ひきる一日
 露寒の被災の泪こぼすまじ
 露寒のつづく野宿に余震なほ
 露霜の野宿の車窓明けそめし
 空広く小城下の上鯛雲
 夕ざれば虫の音しるき山居かな
 敬老日子規を賛へて吾に及ぶ
 台風禍あらはに由良の門は澄めり
 後の月山陰道は山また山
 後の月雲に隠れし情かな
 その中の白が主張をせし千草
 紫は松虫草の吐息とも
 俳磚に歴史刻みし人の秋
 鳥追はんばかりの仕種して案山子
 蟬いつも来て鳴く角の電柱に
 物淋し蟬鳴き尽きしこの日頃

龍ヶ崎 今橋眞理子
 同 同
 京都 安原 葉
 同 同
 龍野 浅井青陽子
 同 同
 榎原 稲岡 長
 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同
 福岡 松尾緑富
 同 同

秋の雲去来病窓思ひ千ぢ
 眠られて夜長の不安消えてゆく
 誕生日花籠千草なることを
 みみず鳴く雨はたとやみみみず鳴く
 東雲の雨こほろぎへ土塊へ
 立冬の寝返り打ちし骨の音
 天空をすべりて移る秋日かな
 大琵琶の浜の高稲架襖かな
 天上のどこかが昏く十三夜
 島人も旅人もなく月に濡れ
 番屋てふ古き景おく秋の川
 欠航といふ露寒の夜をひとり
 人知れず駒草咲きて久を句碑
 秋風をよすがとしたる久を句碑
 秋風や阿蘇見はるかし久を句碑
 鳥渡る声より消えてゆきにけり
 前をゆく人の曲りてより夜寒
 落葉敷き渡りて森の肌かくす
 どの菊もにこにこと福助作り
 肥後菊の寂嵯峨菊の侘いづれ
 二三旬紅葉明りとなる障子
 色鳥や小学生は学校へ
 威銃に驚きてより気付くまで
 秋の薔薇命をこめて咲くといふ

石川 辻口静夫
 同 同
 東京 坊城俊樹
 同 同
 京都 粟津松彩子
 同 同
 神戸 山田弘子
 同 同
 姫路 桑田青虎
 同 同
 大阪 塙 告冬
 同 同
 神戸 後藤比奈夫
 同 同
 東京 今井千鶴子
 同 同

雑詠句評（二月号より）

暮潮・小木菟・純也

一步・基子・比奈夫

弘子・雅昭代

仁義・汀子

鳴き澄める聞く吾虫か虫吾か 長崎 辻 是心

野か庭にすだく虫の中に身を沈めていると、多くの虫の音が高まりながらひとつひとつになって「鳴き澄む」ように聞こえるときがある。そんなとき「吾虫か」と感ずるまでは今までにあるかもしれないが、「虫吾か」とまで思い切つて言つた句はないのではないか。この作者独自の感覚だと思う。「鳴き澄む」「吾虫か」「虫吾か」と考えぬかれた措辞を使つてそれを表した。ひたすら虫の音に浸っている忘我の境をここまで言いたい気持ちには私にも分かるような気がする。（暮潮）

綺麗な音色で鳴く虫の声に包まれている作者は、自分が虫になつたような、又虫が自分だろうかという錯覚に陥つてしまうのである。虫と一体になるほど自然の中にとけ込む作者の暮らしぶりが想像され、自然の豊かな雰囲気や大事にしている心持ちが伝わってくる。（汀子）

芭蕉林葉先に力ありにけり 東京 稲畑廣太郎

芭蕉は見たことがあるが林と言えるほど群生しているのはまだ見たことがない。高さは凡そ五メートル葉は二メートル近くの長楕円形の姿は一本でも目立ち易いが、それが林をなしている様はそれなりに迫力があるものである。破れ芭蕉は痛々しいが、花を終えて葉先に力をみなぎらせているさまは、芭蕉の生命力そのもので見事という他はない。そんな作者の感動の伝わってくる一句ということが出来る。（小木菟）

芭蕉の葉先に力があると見た作者。芭蕉は育つに従つて葉が広くなり破れ易くなつてゆく。それは葉先に力があるのでそのような状態になるとも言える。それら芭蕉が一茎ではなく林をなしているのである。まだ青々と若い葉先に伸びていく力を感じたのであろう。（汀子）（以下略）

若水集

廣太郎選

炉開・落葉

炉開の予定を砕き去りし地震
 庭走る地震の地割れに入る落葉
 落葉降る日々とはなるも余震なほ
 歪みたる地震の山河に舞ふ落葉
 きりもなき落葉きりなき地震芥
 落葉積み地震に潰えし村ひとつ
 炉開の君の情の炎かな
 炉開や人類は火を恋し来し
 炉開の櫛の炎澄みにけり
 炉開の作法に侘のありにけり
 日に乾く落葉の音を踏みにけり
 風を呼び風に牙むく落葉焚
 風の音締め切つて炉を開きけり
 落葉掃き庭の端正崩さざる
 落葉踏む音の湿つてゐる朝
 落葉して海へ一直線の坂
 六甲の谿を吹き飛ぶ落葉かな
 昔日へつながらる音や落葉踏む

京都 安原 葉

同

同

上越 坪野邦子

同

同

長野 鈴木しどみ

同

同

大津 井上孝夫

同

同

立川 日置正樹

同

同

神戸 山田弘子

同

同

父母亡くも里の炉開妹と
 落葉搔くことも供養や里の庭
 地続きの実家へ落葉吹き溜まり
 床もぬげさうにわびけり炉を開く
 古稀過ぎし師の背すぢよき炉を開く
 犬連れて六本の足落葉踏む
 落葉積む火薬庫跡となり久し
 落葉して奈落明るくなつてをり
 落葉踏み落葉ではなきものを踏み
 秒針と落葉踏む音重なりぬ
 堰止めてをりし落葉を流しけり
 落葉分け落した鍵を探しけり
 拾はるる落葉拾はれざる落葉
 椋の木の三本立てる落葉かな
 落葉してわれを囲みて樂しげに
 正客に安座奨めて炉を開く
 羽箒の四方を清め炉を開く
 炉開や茶事の湯相に心おき
 港まで一直線や落葉道
 絵タイルに落葉の色を重ねたる
 音たてて落葉吹かるゝ港町
 後ろ手に赤い落葉を持つてをり
 車庫入れのバックミラーに落葉かな
 炉開やたつぷりと薪積んであり

白石 熊谷敏子

同

同

千葉 真下 鮎

同

同

大牟田 馬場久登

同

同

愛媛 宗末美嘉

同

同

明石 中杉隆世

同

同

東京 橋本くに彦

同

同

横浜 藤木和子

同

同

静岡 劍持靖子

同

同

若水集句評 廣太郎

炉開や人類は火を恋し来し 長野 鈴木しどみ

何か生物の進化を感じさせるような句であるが、確かに「火」を使うのは地球上では人間だけで、それを道具としても発展させたのである。現代では炭を使った炉は生活からは遠ざかってきているかも知れないが、あらためて火と人間の関係が歴史的な観点から再認識できる斬新な切り口である。

炉開の予定を砕き去りし地震 京都 安原 葉

風を呼び風には牙むく落葉焚 大津 井上孝夫

御存知の方も多いと思うが作者の御実家は新潟県である。という事で平成十六年十月に起こった「新潟県中越地震」を経験しておられるのである。特に揺れのひどかった場所に御実家がおありの由で、さぞ恐ろしい経験をなさったと拝察されるが、その心情を込めながらもしみじみと季節に託して詠んでおられる。

きりもなき落葉きりなき地震芥 上越 坪野邦子

どうしてもこの時期の新潟県からの御投句は地震が句材になっているものが多かったが、こちらも新潟の作者である。余震が続き、なかなか瓦礫などの撤去作業がはかどらないのであろう。そんな中「落葉」の季節となりその落葉と「地震芥」とが交じり合う少し哀れな様が伝わってくる。

最近はまだ「落葉焚」を見る機会がないが、消防法や、煙から出る有毒なガスの関係からだろう。それでも景としてはなかなか風情のある季節だと筆者は思うが、この句も「風」の姿を通して季節が燃え尽きて行く経過をダイナミックな動きを伴わせて見事に詠んでいる。

床もぬけさうにわびけり炉を開く 千葉 真下 鮎

生活の上で昔ながらの「炉を開く」仕種とも考えられるが、筆者はどちらかというと古い茶室を想像する。それほど手入れがされていないのだろうか。しかしそれにそれなりの「侘」を感じている作者が見て取れ、厳かな雰囲気だなされる季節の姿が目の前に迫ってくる。(以下略)